

特集 温泉クロナクル



特集・温泉クロナクル

立教大学観光学部



特集

02 温泉クロニクル

04 湯治場における交流

「温泉の場の交のごとし」と称された人と人のふれあい
内田彩

12 ドイツの飲泉

観光資源としての湧き水に関する覚え書き
岩田晋典

20 再創造される「温泉文化」

台湾北投温泉の変遷をめぐって
大橋健一

28 「交流文化」フィールドノート①

心に響く声ごえと出会う
交流文化学科のインタビュー調査実習
葛野研究室

34 聞き書き

廬山温泉成立史
稲垣勉

42 読書案内

日本の温泉の歴史をひもどく
『近代ツーリズムと温泉』
『黒川温泉のドンー後藤哲也の「再生」の法則』

44 学部国際交流の現場から 05

進む海外との学部間交流
タマサート大学と学部間提携
マカオ代表団来訪

中山大学における「観光経済学」講義
小沢健市



立教大学観光学部

観光学科 / 交流文化学科

立教大学観光学部は観光学科と交流文化学科の2学科体制です。フィールドを世界に広げ、リアリティに満ちた学びの場を提供するオンリーワンの観光教育を目指します。



立教大学観光学部
〒352-8558
埼玉県新座市北野1-2-26
TEL 048-471-7375

学部の紹介や入学案内については

<http://www.tr.rikkyo.ac.jp>

[特集]

温泉クロニクル

のんびりと温泉につかり、手足を伸ばすとき、言葉にならない開放感を感じる人は多い。

温泉は数あるレジャーのうちでも、もっとも身体的性格を色濃く持っている。

このため、あたかもワインを愛でるように泉質が語られ、温泉体験が情緒を込めて伝えられる。

もちろん温泉のこうした性格を否定することはできない。

しかし温泉が温泉地としてレジャー空間に転化し、観光の中に位置づけられるためは、

複雑で多様な歴史的な文脈に置かれなければならなかった。

温泉の歴史は時として、地域を越え文化横断的な交流を生み出す。

本号では温泉の歴史をひもとくことで、「交流文化」の相貌をあきらかにしていくことにしたい。



「蘆の湯風呂内の全図」『七湯の枝折』（箱根町立郷土資料館所蔵）

蘆の湯風呂内の全図

ONSEN
CHRONICLE

湯治場における交流

「温泉の場の交のごとし」と称された人と人のふれあい

文・写真 内田彩

日本型リゾートの原型は江戸後期の湯治場にある。
宮城県の鳴子温泉郷での湯治を通じて
日本の温泉地における人々の交流の光景を歴史的にたどる。

温泉に集う人々

日本人は温泉好きといわれ、温泉地はアンケートでも行きたい観光地の上位にあがる。忙しい日々に温泉に入浴し、ほっと息つきたいと思う人は少なくないだろう。こうした日本人の温泉好きの歴史は古く、奈良時代に編纂された出雲国の『風土記』には、玉造温泉について「温泉を求めて老若男女が訪れ、市をなし、入り乱れて宴をおこなう。そして一度入浴すれば美しくなり、再び入浴すれば万病が「いえる」と記されている。温泉が美容効果と薬効のある湯として認識されていたことと同時に、温泉をもとめて人々が集い楽しい宴をおこなう様子がうかがえる。こうした光景は、温泉の歴史を振り返るとき様々な時代に現れる。

筆者が二〇〇七年に鳴子温泉郷（宮城県大崎市、岩手・秋田・山形三県との県境）で湯治を体験しつつ調査を進めているとき、宿には毎春訪れる二人の老人が自炊をしながら長期滞在をしていた。互いに誘い合い入浴や散歩に出かけ、時には共に食事をとる。別れの夜には、ささやかに酒を飲み交わし、翌朝には「また来年」と言いながら宿を立つ光景を目にした。この老人達は、慣れない湯治生

活をおくる筆者を気かけ、湯治生活を暖かく支えてくれた。こうした人と人の触れあいを体験するなかで、この様相が湯治の栄えた江戸時代の史料のなかで出会った記述と似通っていることに驚かされた。時代をこえて同様の光景が生まれるのはなぜだろうか。そこには「湯治場」の持つ特徴があるのではないか。その問いの答えについて歴史を振り返ることから探ってみよう。

リゾートの原型としての江戸後期の湯治場

湯治とは字のごとく、温泉入浴しながら病気を治療することを指し、その期間は三週り(三週間)前後とされている。湯治が盛んになったのは「上ハ王侯より下庶人に至迄湯治すること今に盛也」(『旅行用心集』二八〇年)といわれた江戸時代後期であろう。

二(三)週間にわたり、温泉地に滞在するにはいくつかの条件、例えば長期休暇の取得、多様な価格設定、退屈せずに余暇を過ごす仕組みなどが必要とされよう。今日の研究によれば、江戸時代後期から明治期にかけての温泉地はこれらの条件を満たしていたことが明らかにされている。

当時の農民たちは、農閑期の骨休めや療養

などで湯治に赴き、武士もまた、湯治で温泉地に行く際には、藩から「湯治休暇」が認められた。この背景には、温泉療養が治療の一つとして認められていたことがある。旅が比較的容易になった江戸時代でも、旅をするための理由が必要であり、「信仰」のための参詣と共に「治療」のための湯治は旅をする名目として広く認められていた。国学者である跡部良頭の『伊香保紀行』(二六九八年)は「土農工商ともに病ありて温泉に浴する事、二廻り三廻りの間は其業をやめ、世事の繁多なるを忘れ」とあり、人々が休暇を取り日頃の忙しさから離れて生活を過ごしていた様子がうかがえる。三週間も温泉に入浴して退屈しないのかという疑問が生じるが、湯治場では長期間過ごすための様々な遊びが存在していた。例えば寺社への参詣や、蛸狩りや紅葉狩りといった四季の遊び、名所巡り、土産物の製作工程の見学、釣りなど地域の名所や自然を楽しむことができた。そして海辺では魚、山では山菜など地域の食も味わい、時には温泉熱で酒をお燗している。また江戸時代後期の湯治場は、湯治客が各自の懐に依じた宿で自炊をして滞在した。このように長期滞在ができる様々な仕組みが存在したため、湯治場は日本型リゾート

トの原型として再評価されている。こうしたなか、様々な遊びとともに見られるのが、湯治場で生まれる人々のふれ合いである。



有馬温泉。土産物製作工程の見学「日本山海名物図会」(尼崎市教育委員会所蔵)



「産物の図」『七湯の枝折』(箱根町立郷土資料館所蔵)



ベアトが撮影した幕末の箱根塔ノ沢温泉(国際日本文化センター所蔵)



外国人のみた湯治場

明治初期にお雇い外国人として日本を訪れたバルツが、草津温泉をみて「一種の社交機関」と評したことは有名なエピソードであるが、幕末の写真家F・ベアトのアルバムにも湯治場の社交に着目した記述がみられる。イギリス横浜駐屯軍の将校J・Wマレーが執筆したアルバムの解説シートには、「お客の数やその様子から判断して、温泉を口実に、人々はそこに人に会うために来ているのである。病気の人もいくらかは見かけられるが、大部分の人は、そこでのくつろぎを満喫し、箱根の魅力を楽しむためにやってくる。昨日までは、お互いに知らなかった人々が、いろいろな所から集まってきて、気楽な世間話に花を咲かせる」(横浜開港資料館・一九八七年)と記述されている。日本の湯治文化を知らない外国人の見解ではあるが、著名な外国人達が社交場として湯治場を捉えたことは興味深い。多くの紀行文を残した橘南谿も、不知火見学に集まった人々が、顔も見えないなかで酒をとりだし、小唄、三

味線などの芸を尽くして戯れ遊ぶのをみて「温泉の場の交の如し」記述している(『西遊記一七九五年』)。こうした他人同士が、親しく話し遊び戯れる様子が、湯治場の交流と受け止められたのはなぜであろうか。

湯治場における交流の背景

湯治場の特徴には、見知らぬ人々が長期間にわたり同じ空間に生活することがあげられる。温泉紀行文には「つれづれ」という言葉を目にするが、同じ場所に三週間前後も過ごすことはひまを持て余すことにもなりかねない。特に病を治すために訪れた人々は、体調が優れず遠出がかなわない場合もあった。目を治療するために湯治場を訪れた人は、「若き老たる、男をみなおのけぢめなくもふ来て、しるもしらぬもむつみかたらるつれど」と、老若男女、知り合いも見知らぬ人々ともに語らうことはできたことを記している(『湯倉温泉紀行一八四二年』)。湯治には、今日の療養・保養という側面もあり活発に行動した人々も存在するが、その様な人々でも、温泉地に集っている人はみな病んでいるのだから、うち解け合いながら過ごしましょう(『有馬日記一七八二年』)と述べている。このように「病」を治すという

共通項を持つ人々が、ある種のコミュニティをつくりだしていたといえよう。

江戸時代後期の湯治場での滞在生活において、見知らぬ人同士が交流をもち、互いに時を過ごすことは大きな特徴であった。そしてその背景には、長期滞在という時間、互いを結びつける共通の事柄、そして誰にでも行えるという手軽さが、湯治場独自の交流を生み出す要因であった。

多くの湯治客が集う共同湯での交流

湯治に赴く目的は、当然の事ながら温泉に入浴することである。しかし、江戸時代には今日のように宿に内湯はなく、宿から共同湯に入りに行くのが一般的であった。温泉入浴は、人により異なるが、通常日に三回程度がいいとされており、風呂は一日の長い時間を過ごす場所であった。物語ではあるが『上州草津温泉道中統藤栗毛十篇』では、湯つぽに大勢の人が入浴し、宿で起こった噂話を他の湯宿の客に話すなど井戸端会議をしている様子が描かれている。色々な宿から客が訪れる共同湯は、各自の湯治宿以外の人々と出合い話し合う格好の場所であった。風呂のなかでは、時に湯の良し悪しを話し合い(『塔沢紀行』)



1 鳴子温泉郷 2 大沢温泉(岩手県花巻市) 3 鎌先温泉(宮城県白石市) 4 大沢温泉(岩手県花巻市)

一六九四年)、時には入浴し茹でダコのようになった坊主をからかい、居合わせた人々が笑い合うなど様々なふれあいがあった(『有馬入湯入用記一八六六年』)。そして「今、温

宿での交流

湯治客が最も長く滞在するのは、日常生活の拠点である宿であった。湯治客同士は、長く逗留すれば「朝夕おもてを合わすれば心易くなりぬ(木賀の山踏一八三五年)」と朝夕互いに顔を合わせる機会も多く自然に親しくなった。また、「中のへだておしはなちて、翁がつばねとひとつになして、ひろくしつらへて」(『有馬日記』)と襖を開け隣同士の部屋をつなげてオープンな場所になっている。湯治客の部屋には、同宿の人のみならず主人や他宿の客も訪問しており、ここを起点として新しい人間関係も生まれていた。また宿の主人は、自ら草子や琴を持って客の部屋を訪れるだけではなく、宿が持つ情報を湯治客に提供するなど、宿を単なる宿泊施設ではない魅力ある交流空間にする努力を惜しまなかった。

入浴方法から海外事情まで

多様な情報を介した交流

人々が話す内容や宿の主人が提供する情報は、いかなる意味があったのだろうか。箱根における史料を調べたところ、主な情報は、入浴方法、温泉地域の案内・歴史、好奇心をかき立てる



白炊の風景(上州草津温泉道中統藤栗毛十篇)国立国会図書館蔵

泉に浴して去れば、東話西談南北の人(『塔沢紀行』)と異なる地方の人々と出合い、様々な情報となる場所でもあった。

湯治客の噂話、湯治客の居住地の状況、世情・時事など様々な情報が存在していた。なかでも幕末の一八五四年に逗留した武蔵国の林信海は、世情を騒がせていたペリー来航の話など興味深い事柄を記して帰宅している（温泉場逗留中の記）。林はほかにも船で漂流し十年ぶりにアメリカから帰国したジョン万次郎の物語に書かれた珍しい外国の名前「北亜墨利加マサセーツ国」や、風俗「此所の人顔に彩色す皆黒人も」等を宿の主人等から借りた書籍や文書から熱心に書き写している。多様な地域から人々が集まり、情報を話す機会の多い湯治場では、当時の最新情報も得ることができた。また、宿側が多様な情報を集積させ湯治客に提供したことは、情報の交換が湯治場の魅力の一つであったことを示している。

湯治場におけるサロンの形成と交流

湯治客は宿や共同湯で知り合った人々と共に、散策や名

の交流も、湯治期間の終了とともに一つの終わりを迎える。湯治場を去る時には、多くの人々が宿に訪れ別れを惜しむだけではなく宴会もおこなった（有馬日記）。宴には病が癒えて帰宅できるという「快氣祝」という側面もあった。草津には「立ち振舞」という別れの宴会があり、湯治客は湯治中に知り合った地元の人、隣人に大盤振る舞いをした。このような大きな宴会は、裕福な人々が行ったが、そうでない人もささやかに酒を飲み交わし、互いの住所を交換して別れを惜しんだ。滞在中に何度も遭遇するこうした人々との出会いと別れは、湯治客の単調になりがちな滞在生活に刺激を与えた。そして別れの行動自体が立ち振舞は草津の花」といわれ名物になるなど湯治場滞在の重要な魅力であった。

温泉地の交流

歴史を振り返れば、老若男女問わず誰にで

所見学を訪れており、紀行文に桜や滝などの側で飲食や音楽に興じている様子が記されている。湯治場とその周辺には気楽に休憩かつ交流をもてる空間があり、時には草津の雲嶺庵、箱根の東光庵などの文化人が集う「サロン」が形成されることもあった。東光庵は江戸からきた文化人が集う場でもあり、江戸時代すでに文化人たちの歌碑が建立されていた。こうしたサロンは、江戸の文人と地元の文

人が交流を持つことができる場所である同時に、案内本にも載る観光名所ともなった。当時の温泉地には宿、共同湯、自然散策等、湯治に来ている人々が自然と集まる開かれた空間があり、持続的な関係が保つことが可能であった。

立ち振舞は草津の花——交流の終わり

こうした様々な場所で出合い育まれた人々



『伊香保鉱泉浴客諸病全快祝宴』明治期（木暮金太夫編『錦絵にみる日本の温泉』、国書刊行会、二〇〇三年より）

も、各自の経済状況に応じて行われていた「交流」は、湯治場の滞在中で重要な役割を果たしていた。入れ替わり立ち替わりおとずれる人々との交流は、長期間にわたり同じ空間に過ごすことで退屈になりがちな滞在生活に変化を与えた。ペイトがアルバムの解説に「こうして馴染んだ思いがけない縁が、終生の仲間になる」とある。毎年毎年同じ客が、季節



復元された東光庵（箱根芦之湯温泉）

がよくなると、箱根の湯を訪れる」と記したようにリピーターを生む要因ともなった。

温泉地において、入浴する以外の時間をどのように過ごすのか。これは今日でも多くの温泉地が抱える課題ではあるが、歴史のなかで育まれた湯治場の交流は一つの示唆となりうるだろう。

参考文献

- 板坂耀子編『江戸温泉紀行』平凡社、一九八八年
- 内田彩「江戸時代後期の湯治場における交流」『第一回観光に関する研究論文集』財団法人アジア太平洋観光交流センター、二〇〇七年
- 風早惇編『有馬温泉史料』名著出版、一九八八年
- 神崎宣武『江戸の旅文化』岩波書店、二〇〇四年
- 神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会編『神奈川県郷土資料集成』、一九六九年
- 武井裕之ほか「江戸・明治期の温泉地における長期滞在の構造に関する研究」『都市計画論文集24』、一九八九年
- 横浜開港資料館『幕末日本の風景と人びと』エリックス・ペイト写真集『明石書店』一九八七年
- 狭山古文書勉強会『温泉場逗留中の記（狭山古文書集第22集）』、二〇〇四年



ドイツの 飲泉

観光資源としての
湧き水に関する覚え書き

文・写真
岩田晋典

ヨーロッパで温泉について考える場合、風呂ではなく湧き水として考えるほうがいい。飲泉が一般化しているドイツの温泉地の事例を通して観光資源としての湧き水について考える。

温泉とはそもそも大地から湧き出る水であり、そのうちの温度の高いもののことを言う。こんなごく当たり前に聞こえる言葉からはじめるのはそれなりの訳があつてのことだ。日本語で「温泉」といった場合に第一に連想されるのは、浸かるためのもの、つまり風呂としての温泉であろう。まず「温度の高い湧き水」を思い浮かべる人は温泉研究者か、よ



1 飲泉場コッホブルネンテンベル。2 コッホブルネンの噴水口。3 コッホブルネンテンベルの飲泉口。4 コッホブルネンテンベルのハイルヴァッサーに関する注意書き。5 飲泉口で凝固したミネラル分。

ほどの温泉マニアに違いはない。

けれどもドイツさらにはヨーロッパの「温泉」について考える場合、風呂ではなく、湧き水という字義通りのレベルからスタートする方がいい。温泉とは文字通り「泉」なのだ。人びとはそれを浴びるなり浸かるなり、もしくは飲むなり吸うなりするのである。

飲泉はヨーロッパの名物

温泉の水を健康目的で飲むという行為、つまり飲泉はある意味ヨーロッパの名物である。ドイツをはじめヨーロッパの温泉を紹介するメディアで必ずと言っていいほど紹介されるものだからだ。

日本でも飲泉を勧める温泉地は増えてつあるが、その広まり具合や認知度からすると飲泉はけっして一般的ではない。温泉地の飲泉場所には飲用可と告知されていることが少なくないが、このことはすでに飲泉がありふれた行為ではないことを物語っている。

それに対してヨーロッパの温泉地の場合、飲泉は青銅器時代にはすでに行なわれていた習慣であり、飲泉場は温泉施設にくく普通に設置されている。また、温泉の成分・効能が地域によって多様であるのと同様、味もさま

ざまだ。

ドイツ・ヘッセン州の州都ヴァイスバードンのコッホブルネン Korbunnen で口にした温泉水は、血を思い出すくらい鉄分の強いものであった。コッホブルネンは温泉の噴水で、カイザー・フリードリッヒ浴場のすぐ近くにある。ヴァイスバードン市によると、市内一五箇所の源泉から引かれた温泉水がこの噴水から噴き出しており、その量は毎分八八〇リットルにもなるそうだ（水量には諸説あり）。水温は摂氏六八・七五度で、*Kochend*（沸く、煮える）の *Brunnen*（泉、噴水、井戸）という名前どおりの熱水である。

このコッホブルネンの傍らにある小さなパビリオンが飲泉場所になっていて、誰でも自由に温泉水を飲むことができる。前述のように鉄分が多く、壁には次のような注意書きがある。医療効果のあるハイルヴァッサー。飲料水のように毎日飲むこともしくは医者の方無しに長期間飲用することには適さない。一日あたり一リットル以下の服用量を推奨する。

「ハイルヴァッサー Heilwasser」とは一般的に言うと、普通のミネラルウォーターよりもミネラル成分が多く含まれるものを指すと考えていい。

コッホブルネンがある広場はそのままコッホブルネン広場といい、この広場を中心に歴史的建造物でもある有名ホテルが散在している。この空間構成からは、一八世紀後半以降ヴァイスバードンが上流階級の間で保養地としての名声を博し、さらにその中心部で飲泉が行なわれてきたという歴史を読み取ることができる。

コッホブルネンの噴水も面白い。そもそも西洋社会において、人の住まう場所に泉や池が備わっているという空間イメージは聖書にも遡ることができるものであり、ヨーロッパの大概の都市では広場など、人が集い行き交う地点に噴水が設置してある。けれどもコッホブルネンのように温泉水を噴水に使う例は珍しい。また、温泉水のミネラル分が沈殿凝固して模様を描き、噴水の外見はまるでモダンアートのようになっている。ヴァイスバードンでは温泉が浴びたり飲んだりするためのものだけでなく、街の中心の象徴、そして人びとが鑑賞する対象にもなっているようだ。

ヨーロッパにおける飲泉の歴史

先に触れたように、ヨーロッパにおける飲泉の歴史は古い。古代ローマ以前のケルトの

時代にまで遡ることができるものであり、そこには泉が人間の生命に奇跡的な力をもたらすという聖泉・聖水の信仰があった。温泉地として名高いドイツ・アーヘンの都市名は古代のゲルマン語で「水」を意味する言葉に由来する。また、ローマ時代の名称はケルトの水の神グラヌスに因んだものであった（V・クリチェク『世界温泉文化史』、国文社、一九九四年、一七頁）。癒しの泉についての記述がたしかに聖書にあるとしても、ヨーロッパの聖泉信仰はキリスト教とともに導入されたのではなく、キリスト教が広まってから、聖書を中心とした象徴体系の中で再構成されてきたとまとめるのが妥当である。

とはいえ、飲泉が活発になったのは、浴場が売春宿を兼ねることさえあった中世に性病の蔓延によって湯治場が衰退した後のことで、西暦で言えば二六世紀末から一九世紀にかけてといわれている。肝臓や胆嚢、胃腸などの病気を抑えるもしくは予防する目的で、鉱泉水がすすんで飲まれることになった。ただし、尿が水と同じ色になるまで一日数リットルをひたすら飲み続けるのを良しとするような飲み方もされたし、また、成分によっては飲みづらい温泉水をワインや乳製品と混ぜて飲用するこ

一四・四リットルであったのに対し、スペインをはじめとする西ヨーロッパの国々ではその十倍前後が消費されている。

そもそも飲泉の一つの発展型である湧き水を瓶詰めにして飲むという行為、そしてその売買は、ヨーロッパではすでに一六世紀に始まった。その後こうしたミネラルウォーターの流通は拡大し続け、ドイツ・ニーダーゼルトアスのゼルトアス水のように、近代におけるヨーロッパ列強の世界進出とともに世界各地にまで輸出されていったものもある。ちなみに「ゼルトアス」という名称はドイツ語でミネラルウォーター一般を指す名詞にまでなっている。

今日では、ヨーロッパだけではなくヨーロッパ外部で生産されたものも含め、膨大な数のミネラルウォーターがヨーロッパ大陸内を流通している。ドイツ連邦共和国消費者保護食品安全局のホームページではEUが認可したミネラルウォーターの一覧が公開されており、それによると、マルタをのぞくEU加盟国二六カ国で生産される商品の銘柄数は全部で二〇一九に上る。

その中で最も多くの商品銘柄を生産しているのはドイツだ。銘柄数は二位イタリアのほ

ともあった。

さらに一八〜一九世紀にヨーロッパの温泉地が王侯貴族・上流社会のリゾートとしての性格を強めていくと、飲泉は療養手段として温泉地での生活の中で大きなウェイトを占めるに到る。飲泉の重要性は、飲泉施設と散歩用の庭園が社交の中心クアハウスとともに保養地特有のクラシックな景観を構成していたことにも表われている。たとえば、一九世紀前半にコリント様式のコロネードとともに建造されたバーデン・バーデンの飲泉館 Trinkhalleはそのいい例だ。

ミネラルウォーターの飲用

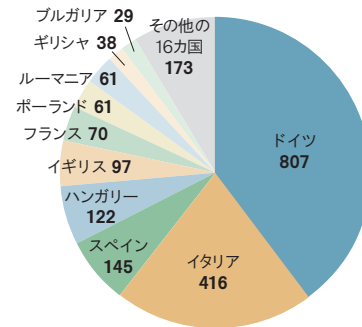
以上のような「ブーム」を念頭に置くと、現代において飲泉は下火になってしまったと結論付けたくなるかもしれない。けれども、体を癒したり健康状態を保つために地下から湧いた水を飲むという行為は、今日でも活発に実践されている——ミネラルウォーターの飲用である。

日本や米国と比べてヨーロッパのミネラルウォーターの消費の規模には目を見張るものがある。日本ミネラルウォーター協会によれば、二〇〇五年日本の一人当たりの年間消費量が



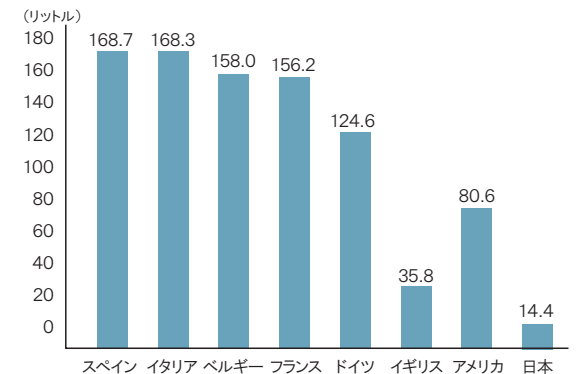
1 バーデン・バーデンのクラシックな飲泉館 (Trinkhalle)。観光案内所でもある。2 バーデン (スイス) の公共温泉プール。お年寄りのほか家族連れもいる。3 バーデンの飲泉室。公共の温泉プールのとなりにあり、誰でも自由に利用できる。温泉水は硫黄の味が強い。

EUで認可されたミネラルウォーターの商品銘柄数 (2008年)



データ:ドイツ連邦共和国消費者保護食品安全局の資料を元に作成

各国別1人当たりのミネラルウォーター年間消費量 (2005年)



データ:日本ミネラルウォーター協会の資料を元に作成

ば倍、八〇七に達し、ドイツ二国で実に全体の四〇%を構成している。専用ケースに入れられ積み上げられた幾種類ものミネラルウォーターを前に、天井からつるされた値段の表示板を見つつ、客がお目当ての商品をケース毎シヨッピングカートに移しレジに向かう——こうした光景はドイツのみならずヨーロッパのスーパーマーケットでありふれたものだ。

またドイツには、EU認可の商品としてのミネラルウォーターのほか、「ハイルヴァッサー」の名称で流通しているミネラルウォーターもある。前述のように一般的にハイルヴァッサーは成分の濃いミネラルウォーターのことを言うが、この場合はドイツ連邦共和国医療品医療機器連邦研究所で成分検査されたものになる。法律上はミネラルウォーターが食品であるのに対して、ハイルヴァッサーは医薬品扱いだ。ハイルヴァッサーとして認定された場合はラベルに効能や使用方法、副作用、推奨摂取量なども記さなければならぬ。ウェブサイト『ドイツ・ハイルブルネン』によれば、二〇〇九年四月時点で全部で五一銘柄のハイルヴァッサーが存在する。

では、これらのミネラルウォーターのうちどの程度が温泉地で採取された商品なのか。2009年「で「赤ちゃんの食事に適している」と宣伝するミネラルウォーターをいくつも比較しているが、結局「推薦」として第一に挙げたのは、調査対象となつたいずれの商品でもなく、通常の水道水であった。乳幼児用の調理にミネラルウォーターを使うのも悪くはないが水道水でも十分に可能、とのことである。ドイツの一人当たりのミネラルウォーターの消費量が他国よりも少ないという先の統計結果の背景には、良質な水道水の存在があるのかもしれない。

ミネラルウォーターでも同じように地下水を水源にしていることが強調される。ボトルのラベルに地下水源のイラストが描かれていることは珍しくない。たとえば手元にあるミネラルウォーターのラベルには、水が通過しない地層によって地表で生じうる環境汚染が

か。商品データの中から、温泉保養地に与えられる「バートBad」という名を冠する地名や、温泉地としてよく知られた地域をざっと数えただけで、全八〇七銘柄の約二割が温泉地産のミネラルウォーターであることが分かる。ハイルヴァッサーでは割合を増して、全五一銘柄の約半数、二五銘柄となる。

ただしドイツ社会では、過剰摂取が危険なナトリウムをのぞき、どのミネラル成分がどの程度含まれているかを考慮して購入すべきミネラルウォーターを選ぶというよりは、そういう一般的ではないようだ。ベルリンなど、地域によってはすでに水道水にカルシウムなどのミネラル分が多く含まれることも背景にあるのかもしれない。

日本との比較

日本とドイツを比較した場合、飲料水の水源に対する考え方に大きな違いがあるようだ。疫病が広まった過去から、ドイツでは一般的に川の水は飲料水には適さないと考えられている(坂井洲二『ドイツ民俗紀行』法政大学出版局、一九八二年、一八五頁)。

ドイツ語で飲料水は「トリンクヴァッサー「Trinkwasser」というが、この言葉は事実上水道から地下水が守られているという様子が図示されている。そこでは、水源が地表から隔離されている自然条件あるいは単に水源の深さを表すことで、その水がいかに「ピュア」で、人為にさらされていない「自然」な水なのかが主張されているのだ。地中深くの手付かずの自然、といったところか。

これに対して、日本で地下深くから湧き出した水といえはまず風呂としての温泉が思い出されるであろう。面白いことに日本のミネラルウォーターの説明は、ドイツのそれと対照的なものになっている。たしかにラベルやウェブサイトで水が地底を流れることに触れている商品は存在する。けれどもむしろ重点が置かれているのは、水が地下に入る前の環境、すなわち山や森林など地上の自然環境についての説明であり、それを表す山々や木々、

水を指している。こうした飲料水/水道水に関して活動する団体の一つに、フォーラム・トリンクヴァッサー協会がある。この団体は「食品としての水道水」について社会の意識を高めることを目的に据えている。「食品としての水道水」という言い回し自体、日本社会では面白いものであるが、同団体によれば、ドイツの水道水の水源のうち地下水(井戸水を含む)が占める割合は七四%、残りが湖沼河川などの地表水となつている(ただし統計時期は不明)。日本の場合、日本水道協会による二〇〇七年度の統計では地下水が二四%で地表水が七三%というように、ほとんどドイツの逆だ。「だから日本の水道水は不味いのか——」この割合を聞いたあるドイツ人の言葉である。

実際にどちらの水が美味しいのかは別にして、ほとんど断定的に地下水に軍配を上げた反応が印象的だった。フォーラム・トリンクヴァッサー協会は、「こんなにも規則的かつ頻繁に品質管理されている食品は他にはない」と水道水を誇っている。また、商品の比較調査を専門にする雑誌「エコ・テストOKO-TEST」も同協会と同じようにドイツの水道水の質の良さを認めている。同誌は乳幼児用商品の特集号「OKO-TEST Jahrbuch Kleinkinder für

雲などのイメージの方だ。さらに、神秘的な名称や宣伝句を用いるものも目立つ。「山の神様がくれた水」——これは大手メーカーのサントリーが売るミネラルウォーター「天然水」のコピーである。

ドイツのみならずヨーロッパにおいて泉が飲むためにも浴びるためにも使われている姿を知るには、温泉地を訪問するのが一番であろう。たとえば世界中に流通しているフランスのボルヴィックやエヴィアン、イタリアのサン・ペレグリーノのように、飲泉施設を備えているのはもちろん、ミネラルウォーターの採水地でもある温泉地では風呂やプールから、飲泉施設、ミネラルウォーターの工場、博物館にいたるまで、湧き水が観光資源としてどのように機能しているのかを知ることができるのである。



ボトルの裏に記載された水源の図。



バーデン・ビュルテンブルク州のスーパーマーケットのミネラルウォーター売り場。こうしたケースの列が4つあった。

- 【ウェブサイト】
ワイズバーデン市
<http://www.wiesbaden.de/>
日本ミネラルウォーター協会
<http://www.minekyo.jp/>
ドイツ連邦共和国消費者保護食品安全局
(Bundesamt für Verbraucherschutz und Lebensmittelsicherheit)
<http://www.bvl.bund.de/>
フォーラム・トリンクヴァッサー協会
(Das Forum Trinkwasser e.V.)
<http://www.forum-trinkwasser.de/>
ドイツ・ハイルブルネン
(Deutsche Heilbrunnen)
<http://www.heilwasser.com/>

北

投温泉は、経済発展著しい台湾の大都市台北の中心部から「MRT（Mass Rapid Transit）台北大衆捷運系統」と呼ばれる交通システムで約三十分という市街地から至近の郊外に位置している。こゝともあって、休日ともなると多くの台湾のレジャー客でにぎわう温泉観光地となっている。台湾には、北投温泉以外にも多くの温泉地が存在し、今日台湾では一大温泉ブームが起きているとも言われる。しかし、その背景を紐解くとき、われわれは日本による台湾の植民地化、脱植民地化と国民党による台湾支配、そしてその後の台湾社会の民主化といった一連の台湾をめぐる社会政治状況の変遷に気づく。北投温泉は、数ある台湾の温泉地の中でも上述のような台湾の近現代史の動向を如実に反映した温泉地としてきわめて象徴的な場所である。北投温泉の変遷を通して、観光という現象がそれを取りまく社会政治状況と複雑に関係しながら展開していることを確認してみよう。

台湾の植民地化と北投温泉の形成

一八九五年、日清戦争の結果調印された下関講和条約によって、台湾は日本に割譲さ

再創造される「温泉文化」

台湾北投温泉の変遷をめぐって

文・写真 大橋健一

台湾には今、温泉ブームが起きている。だが、その歴史を紐解くと、日本による台湾の植民地化、脱植民地化と国民党による台湾支配、その後の民主化という社会政治状況の変遷が反映していることが見てくる。



北投温泉の中心にある「地熱谷」



北投温泉博物館（旧北投温泉公共浴場）



1 北投温泉博物館（旧北投温泉公共浴場） 2 日本統治期の北投温泉公共浴場 3 日本統治期に建てられ、現在も営業している温泉旅館の浴場 4 同旅館の座敷 5 同旅館の座敷 6 日本統治期に建てられた旅館で現存するものは、台北市の歴史遺跡にも指定されている

れ、一九四五年までの間、台湾は日本の統治を受けた。日本統治前から硫黄の取引のため北投には外国人商人が入り込んでいたが、一八九四年、ドイツ商人オウリー（Owley）が温泉利用を始めたのが、温泉地としての北投の始まりだと言われている「注1」。しかし、その本格的な開発と利用は、日本による統治開始の翌年の一八九六年というまだ治安の不安定な時期にもかかわらず、大阪出身の日本人、平田源吾が「天狗庵」という旅館を早くも開業したことから進んでいった。その後、北投には「松涛園」「保養園」「北投館」「松島屋」などの日本人が経営する旅館が次々と開業し、温泉地となっていった。

他方、北投の温泉資源は、民間による温泉地開発とは別に日本の陸軍によっても注目されていた。日本は、一八九五年に台湾統治を始めるると軍の衛生医療体制を整備するため同年には早速台湾総督樺山資紀自らが北投を視察し、陸軍病院建設のための用地確保が行われ、一八九八年には台北陸軍衛戍病院療養分院が建設された。

そして、一九一〇年以降、北投では、さらなる温泉観光地としての本格的な整備が進んだ。北投に温泉資源を利用した遊楽観光地を

建設する計画が台北庁によって一九一〇年に立案され、一九一三年には、「北投温泉公共浴場」が建設された。建設費五万六千円（当時）を投じて建設された「公共浴場」は、レンガ造りの一階と木造の二階からなる英国ビクトリア様式を基調とした和洋折衷の建築で、一階部分には西洋式の大浴場が設けられていた。また、隣接地には公園も整備され、北投の温泉観光地整備計画は、欧州の温泉施設の強い影響を受けていたことが指摘されている。さらにその後、一九二三年、当時皇太子であった裕仁が台湾行啓をした際、その行程には総督府や台湾神社、各種産業・軍事・教育施設の視察と並んで北投温泉の訪問も含まれていた。「公共浴場」では、この際、皇太子裕仁を迎えるために特別休息所を増築した。皇太子裕仁の台湾行啓は、日本による台湾支配の自明性を強化する政治的儀礼であったとも指摘されているが、そのような行啓における北投訪問は、日本式の「温泉」という文化装置が台湾に存在することの自明性を強化するとともに、何よりも温泉観光地としての北投の名を一躍有名にし、利用者的大幅な増加がみられたという（ちなみに筆者は、一九九〇年代末に北投温泉を訪問した際、一九〇七年から営業して

いる「瀧乃湯」という公共浴場の裏庭に「皇太子殿下御渡渉記念」と刻まれた石碑が横倒しになったまま放置されているのを発見した）。

日本統治期の北投温泉の利用者の多くは、日本人であり、そこには性風俗をも含んだ日本の温泉遊興文化も持ち込まれ、一部に富裕台湾人の利用や台湾人による旅館経営も行われていたというものの、一種の特権的な日本文化租界としての性格を濃厚に帯びた空間ができていった。

戦後の台湾と北投温泉

第二次世界大戦後、台湾は日本の植民地支配から解放された。それと同時に日本人は台湾を去ることとなり、北投温泉の旅館の経営も日本人から台湾人へと代わっていった。

いっぽう、終戦とともに中国本土での国民党と共産党の抗争が激化する中、抗争の主たる舞台の外にあった台湾には、中華民国国民政府（国民党政権）の軍隊が進駐した。一九四五年十月、国民党政権の行政長官は、台湾のすべての土地、住民は中華民国国民政府の主権下におかれる旨の声明を發布し、台湾人の意思に関わらず「日本」から「中華民国」への国籍変更が一方的に行わ

れた。進駐した国民党兵士による強奪や官吏の腐敗なども手伝って、日本から脱植民地化したものの、台湾人は国民党による転倒した内国植民地状態に再び置かれた。一九四七年には、外省人警官の横暴に端を発した、いわゆる「二二八事件」が発生し、国民党政権に対する台湾人の抵抗を鎮圧するため、国民政府軍の増援部隊が台湾に上陸し、多くの台湾人に対する虐殺、肅清が行われた（「二二八事件」に関連して一ヶ月程の間に殺害された台湾人の数は、一万八〇〇〇〜二万八〇〇〇人であったと推定されている。「若林 二〇〇一：七二頁」〔注2〕。その後、一九四九年五月には、戒嚴令が施行され、同年十二月に国民政府は正式に台湾に移転し、以後、蒋介石父子による一党専制の下、長きにわたって台湾人は政治的沈黙を強いられることとなった。他方で、台湾は、東西対立を背景にアメリカからの援助を受け、工業化による開発を進め、その後NIEsの一角を占める経済成長を達成してゆく。



台湾から見た「日本」のイメージを具現化した温泉ホテル

さて、このような台湾をめぐる戦後の社会政治状況の中、北投温泉はいかなる状況にあったのだろうか。日本温泉の遺物を残しながら台湾化した温泉遊興文化（台湾歌謡、楽器演奏など）が一部の裕福な台湾人によって維持されたようだが、むしろ「北投温泉」の名は、日本の高度経済成長が生み出した日本人海外観光客の間で有名になっていった。台湾における経済開発の初期段階が日本の高度経済成長と重なったこともあり、当時の台湾における公娼制度の存在と外貨獲得のための外客誘致といった要素も加わって、北投温泉には、日本から多くの買春ツアー客が訪れ、それら

のツアー客を收容するために大型ホテルが次々と建てられたのであった〔注3〕。
ローカル・アイデンティティと
北投温泉の再生

一九七五年の蒋介石の死後、政権を引き継いだ息子の蔣経国は、一九八七年に約四〇年間の長きにわたって継続してきた戒嚴令をようやく解除した。同年には中国本土への旅行も解禁された。翌年、蔣経国が死去すると李登輝が本省人初の総統に就任した。戒嚴令解除前夜から徐々に動き始めていた台湾における民主化の動きは、以後一気に加速する。むしろこの背景には、東西冷戦の終焉とグローバル化の進展、中国における改革開放政策の導入と中台交流の展開など台湾をめぐる国際情勢も大きく関係している。ことは言うまでもない。長期にわたる戒嚴令と政治警察支配が崩壊したことで、政治的自由化が進展すると共に、台湾ナショナルリズムの台頭も見られるようになった。一九八六年には、戦後台湾初の野党として「台湾の前途の住民自決」を謳う民主進歩党が結成され、一九九四年の台北市長選挙では同党から陳水扁が当選した。その

後、陳水扁は、一九九八年の市長選挙では再選を果たせなかったものの、二〇〇〇年の総選挙で劇的な政権交代を果たし、野党出身の本省人総統が誕生した。

さて、このような台湾をめぐる大きな政治的転換期において、北投温泉でもそれに呼応するように新たな展開が見られた。まず、一九七九年、台湾における公娼制度が廃止されたことよって北投温泉は、家族連れで楽しめる台北近郊のレクリエーションの場とはなったが、日本人観光客の激減によつて「観光地」としては衰退し、大型ホテルの中には

廃業するものもあった。現在でも廃墟と化した当時の大型ホテルが放置されている状態を見ることが出来る。他方、政治の民主化と連動して「台湾文化」の独自性の主張や形成を目指す一種の文化ナショナルリズムの動きも見られるようになったが、このような動きは、台湾史や郷土史への関心を呼び覚まし、地域レベルにおいても郷土の歴史文化の掘り起こしを促すこととなった。

一九九五年、北投の地元小学校の郷土学習において、荒れ果てた草むらに放置されたまま廃墟と化していた日本統治期の旧「北投温

泉公共浴場」について生徒たちの中から「なぜ歴史的に意義のあるものなら保存しないのか」との素朴な質問が教師に発せられたという。これをきっかけとして教師や地元のコミュニティ活動家たちは同年「八頭里仁協会」というコミュニティ団体を発足させ、旧「公共浴場」の保存運動をはじめとして各種のコミュニティ運動（歴史遺跡保存、郷土学習、北投のイメージと温泉事業の更新、自然景観の保護と親水公園建設計画の推進など）を展開していった。これらの努力の結果、一九九七年に台北市は旧「公共浴場」を文化財に指定し、さらに建築修復を行い、翌年には「北投温泉博物館」およびコミュニティの生涯学習センターとして整備された。同館の修復起工式には陳水扁台北市長（当時）も出席し、運動のきっかけを作った小学生たちには表彰状が贈られたという。北投温泉再生の動きは、台湾の民主化の中から生まれた民主進歩党出身の本省人台北市長による市政のありようをも背景としていることが窺われる。

北投温泉の現在 「温泉」の再解釈と再創造

「北投温泉博物館」の開館を契機に北投温泉

北投温泉関係略年表

1894	独人商オウリー、北投で温泉利用開始
1895	下関講和条約締結
1896	平田源吾、北投に旅館「天狗庵」開業
1898	北投に台北陸軍衛戍病院療養分院開設
1913	北投温泉公共浴場開設
1923	皇太子裕仁、台湾行啓。北投温泉を訪問
1945	第二次世界大戦終了 国民政府軍台湾進駐
1947	二・二八事件
1949	戒嚴令施行。国民政府、台北に遷都
1975	蒋介石死去
1979	公娼制度廃止
1986	民主進歩党結成
1987	戒嚴令解除
1988	李登輝、総統に就任
1994	陳水扁、台北市長に就任
1995	八頭里仁協会結成
1997	台北市、 旧北投温泉公共浴場を文化財に指定
1998	北投温泉博物館開館
2000	陳水扁、総統に就任
2010	「加賀屋北投」開業予定

は、以降さらなる新たな状況を迎えている。

現在でも北投を訪れる日本人観光客は存在するが、それは少数であり、北投温泉の主要観光客は、台湾の観光客となっている。したがって、北投温泉で用意、提供されている観光サービスの性格も主として台湾人に向けたものとなっている。立教大学観光学部大橋研究室で二〇〇六年に行った現地調査では、現在の北投温泉に見られる宿泊施設は、①日本統治期に建てられ現在も営業する日本式温泉旅館、②戦後建てられた温泉ホテル、③近年建てられた温泉（スパ）リゾートホテル、④今後開業予定の日本から進出する温泉旅館ホテルのおおよそ四つのタイプに分類できることが明らかとなった。これらはそれぞれ設立の背景が異なる宿泊施設であるが、いずれもその顧客の大部分を台湾の観光客が占めている。

①は、現在二軒のみが営業しているが、日本統治期に日本人経営者によって開業された旅館であり、一部改修はされているものの、外観はほぼ当時のまま残されており、瓦屋根の日本式家屋で日本風庭園を有している。しかし、畳の部屋に中国式円卓や椅子が置かれていたり、出される料理も台湾料理であるなど、台湾人経営者によって台湾人の顧客に合

が百年の時を経て遠い記憶を結びつけ、「純正和風」の「国際温泉文化旅館」が二〇一〇年に創造される、というストーリーが構成されている。日本の「加賀屋」本館のイメージ画像も多く取り入れられているものの、北投の街を浴衣姿の台湾人と思われる若い女性が散策するイメージ画像のスライドショーの表現など、それはあくまでも「加賀屋北投」という台湾的文脈において再解釈され、再創造された「和風旅館」であるといえよう。

このような動きの背景には、一方で日本において進行している地方観光地における外客誘致戦略という現代日本の観光産業をめぐる状況がありつつ、他方では、単なる観光マーケティングをめぐる議論だけでは済まない、台湾の社会文化をめぐる歴史状況が深く関係していることも忘れるわけにはいかないだろう。すなわち、それは、戦後台湾におけるいわゆる「省籍矛盾」と呼ばれる本省人・台湾人における反外省人・反国民党感情の反射としての「親日感情」という極めて複雑な問題である。むしろ、今日の台湾における日本ブームや温泉ブーム現象のすべてがこの問題によってのみ説明できるわけではない。日本系百貨店の進出、雑誌やCD、ゲームはも

わせた利用がなされている。②は、戦後、台湾人経営者によって建てられたものであるが、富士山の写真パネルや日本の甲冑など台湾から見たステレオタイプの「日本」イメージ

の断片のみがホテル空間の各所に散りばめられている。また、それらホテルの名称も「京都」「熱海」「浅草」など「日本」イメージをストリートに表現するものとなっている。③は、台湾における経済成長による所得水準の上昇に伴って出現した高級温泉（スパ）リゾートホテルである。現代日本の温泉旅館ホテルの空間デザインを徹底的に研究し、細部にまでこだわりコピーを試みたり、日本人の建築デザイナーに設計を担当させるなどして作り出された現代日本風温泉リゾートホテルである。これらホテルが手本としたような現代日本の温泉リゾートホテルを既に日本への観光旅行で経験している台湾の人々も多く、そのような人々にこれらのホテルはアピールしているという。台湾からの訪日観光客は二〇〇五年に一二七万人を数えており、これは訪日観光客数第一位の韓国に次ぐ多さである。このような動きがさらに④のタイプの新たな宿泊施設の北投温泉における出現を後押ししている。④のタイプとは、「歴史遺産」としての「日

ちろん衛星放送や日本番組専門チャンネルなどの各種メディアを通した日本に関する情報が氾濫する環境も大きな影響力をもつ現象である。しかし、それでもなお、それは近年になって突如出現したのではなく、近現代に台湾が経験してきた社会政治状況が確実に底流に存在している。

北投温泉とは、まさにこのような台湾社会の変遷が重層化している場所なのである。



「加賀屋北投」の建設予定地

本温泉」でもなければ、「ステレオタイプ」

としての「日本温泉」でもなければ、「コピー」としての「日本温泉」でもない、日本からの温泉旅館の北投への（再）進出という新たな動きである。具体的には、石川県七尾市の和倉温泉にある一九〇六年創業の老舗旅館「加賀屋」が台湾のデベロッパと合併で「加賀屋北投」という温泉旅館ホテルの開業を二〇一〇年に予定している。大橋研究室による二〇〇六年夏の現地調査時、北投温泉開発の発祥に関わる「天狗庵」跡地とされる建設予定地には既に囲いが設けられ、「加賀屋北投」の名が大書されていた。新聞報道によれば、この背景には、一九九七年から本格的に行われた能登空港を利用したチャーター便による台湾からの誘客によって「加賀屋」が実績とネームバリューを持つに至ったことがあるといい、石川県知事が台湾訪問をした際も、「北投で日本の旅館文化に触れてもらい、本物を石川で堪能してほしい」とコメントしたという（読売新聞二〇〇八年四月五日）。

この「加賀屋北投」のオフィシャル・ウェブサイトに於ける紹介では、一九〇六年創業の日本における「加賀屋」と一九九六年の台湾北投最初の温泉旅館「天狗庵」、この両者

注
1.台湾には、漢族が移住する以前から複数の先住民族が生活していた。北投はその居住地のひとつであった。
2.日本でも話題となった台湾映画「悲情城市」（松竹資監督、一九八九年作品）は、この「二二八事件」をテーマとした作品である。映画は九份という街を舞台としているが、映画公開後のこの街は一大観光地として有名になった。
3.戦後台湾における公娼制度を背景とした日本人買春観光に關しては、たとえば、日本人買春観光団のガイドを務めたことになった台湾青年の苦悶と悲哀を描いた黄春明の小説「さよなら、再見」（原題「莎」那拉・再見）一九七四年作品。邦訳は「さよなら・再見」田中宏・福田桂二訳、めぐみ、一九七九年に所収。に当時の様子が窺われる。また、台湾観光を事例に日本人の観光を民俗学的視点から分析した神崎宣治は、その著書の一章を「旅の中の性」というテーマにあて、台湾における日本人買春ツアーについて言及している。神崎宣治「観光民俗学への旅」河出書房新社、一九九〇年。

付記
本文中にも言及したように本稿の作成に際しては、立教大学観光学部大橋研究室（二〇〇六年度「専門演習」）で実施した台湾における現地調査の成果に多くを負っている。現地調査でお世話になった関係各位に謝意を表すとともに、台湾調査に参加し、報告書の執筆に関わった奥彩香、渡部恵美、宮路真人、坂村直子、巻知加子、岸千亜希、篠田佳奈子、根塚由紀子、武井恵（順不同）の諸君の努力を讃えたい。

参考文献

（邦文）
伊藤潔『台湾—四百年の歴史と展望—』東京：中央公論社、一九九三年
曾山毅「植民地台湾と近代ツーリズム」東京：青弓社、二〇〇三年
戴國輝『台湾—人間・歴史・心性—』東京：岩波書店、一九八八年
立教大学観光学部大橋研究室編『アジアホテル史研究』第五号、二〇〇七年
若林正文『台湾—変容し躊躇するアイデンティティ—』東京：筑摩書房、二〇〇一年
（中文）
洪徳仁編著『戀戀北投温泉』台北：玉山社、一九九七年
『北投社』第八期（八頭里仁協会）、一九九八年四月

様々な共通性と差異とが入り混じると、「声の複数性」と直面することになります。また、一人の語り手の中にも、時には互いに矛盾もする様々な姿勢やメッセージが重なるという、「声の重層

すべてを学生たちが主体的に進めます。

これらインタビュー調査でゼミ生たちは、数々の語り手の間に

私が指導する文化人類学のゼミでは、まだゼミに入ったばかりの2年生がインタビュー調査に挑戦します。2007年度には「日本文化に恋した外国人」を、2008年度には「地域専門旅行会社で働く人びと」をテーマとしたインタビュー調査を実施しました。調査テーマの決定から、インタビュー対象者への依頼やスケジュールの調整、録音したインタビューのテキスト作りや整理・考察まで、

観光学部交流文化学科の教育では、インタビュー調査やフィールドワーク調査の実習を重視しています。授業や本やテレビを通して「 Hyde オロギー」の体系といった顔を画的に確認することだけで、「文化」を「分かった」ことにしないためです。人びとの生の声や現場でのふるまいといった個別具体的な「プラクティス」の多様性と、まずは学生一人ひとりが直接に向き合ってみること、そのことを何よりも重要だと考えているのです。

以下では、2007年度の「日本文化に恋した外国人」インタビュー調査と、2008年度の「地域専門旅行会社で働く人びと」インタビュー調査とを、ゼミ生たち自身が紹介します。ゼミ生たちは自分たちが出会った「心に響く声」の中からいくつかを選び出し、整理して並べ、そこから何かを引き出そうと努めています。しかし、こういった作業の過程が「ひとつの声」の持つ豊かさをのっぺりとした「 Hyde オロギー」へとまとめ上げてしまふ作爲と背中合わせであることに気づき、たじろいでもいます。そして、そういったたじろきこそが、ゼミ生たちが「文化」を見つめる学術の入り口にしっかりと立ち始めていることを物語っている、と私は受け止めています。以下の誌面を通して、まずは読者の皆さん御自身が、ゼミ生たちの出会った「心に響く声」を「ごえ」と真っ直ぐに対面していただければ幸いです。(葛野浩昭)



日本文化に恋した外国人インタビュー調査：
カナダ出身の落語家ロービックさんと

秩父市川瀬祭りのフィールドワーク：学生たちは祭りの衣装を整えて参加・観察型の調査を行った



心に響く声ごえと出会う

交流文化学科のインタビュー調査実習

葛野研究室(観光学部)

voices/ polyphony



そうぞうりよく

ダイアン・オレットさん (大阪にお住まいの落語家: イギリス出身)

「最近想像を使わなくていい世界になってるから、落語すごくいい。イメージーション使う。景色がない、衣裳もない。一人だけになってるけど、想像できるようになる。お客さんから見たら今誰が話してる、今何人くらいいるとか、想像できなかったら失敗だと思う」

想像力を使うところが落語の良さ。少しでもわかりやすく、想像力を働かせやすくするために、声色・動作・目線・単語一つまでに気を使う。

にほんてき?

アラン・ウエストさん (東京にお住まいの日本画家: アメリカ出身)

「奥から出てきて、こんにちわって言うと、必ずあつ、でも何か違うんだよねって、日本人じゃ描けないよねって。なんだろうか、そういう反応の奥にあるものが非常に嫌ですね。ゴッホはオランダ絵を描いていたわけでもないし、フランス画でもないし、ゴッホはゴッホの絵ですよね。で、そういう分けなきやいけないという精神が失礼にあたるというか」

絵を描くこと、絵を観ることに、その人の国籍を問おうとは思わないアランさん。そして、アランさんの創り出す日本画を、どうしても「純粋な日本文化」としては見ることのできない私たち。



Wake up !

デービッド・ブルさん (東京にお住まいの木版画家: カナダ出身)

「僕の好きなことはこの国の人たちが忘れた、小さな社会の中のひとつのことを、将来まで守る考えはないですが、自分が好きですから自分がやるんですね。That say, I came from another country, I discovered nice part of Japanese culture you forgot about it, I'm saying "Hey ! Wake up, wake up ! Please remember" 光です。光。いい材料で、いい道具で、職人の腕、もう素晴らしいですが、その力全部合わせて、きれいなものになるんですよ」

日本人が忘れてしまったという木版画の美しさ、光。デービッドさんが「日本人が忘れてしまった」と語るものとは、いったい何なのか。



あにでし・しんでし

南乃島勇さん (武蔵川部屋の大相撲力士: トンガ出身)

「最近なんかあんまり言っても全然返事しないから、あーこれだんだんこういう兄弟弟子新弟子の関係がなくなっていくのになって。厳しくしなきゃならぬ。で、やっぱり厳しくしたらその新弟子のまた新しい新弟子が入ってきたら、その、兄弟弟子と新弟子の関係があるから、やっぱりやらなきゃだめ」

伝統が続いているのは、厳格なしきたりが守られているからこそ。入門当初、兄弟弟子・新弟子関係や厳しい稽古に戸惑った。しかし、自分が新弟子を迎える側になると、伝統を受け継いでいくためには厳しさが必要だと感じたという。

いちごいちえ

ランディー・チャネル宗榮さん (京都にお住まいの茶道家: カナダ出身)

「素晴らしいのは、その、やっぱり人間の出会い。相手がいないと茶道にならない。その時間を一緒に過ごすことがすごく特別。だから、よく一期一会と言うけれど、その時間をこの人と一緒に過ごすことは、普通のパーティーより大事」

一期一会。その時、その人とのつながりを茶室で大切にすることは、はじめは柔道などの武道に取り組んでいた。武道と茶道との間には、身体の使い方に共通性を感じているという。



じょうげかんけい

グレッグ・ロービックさん (大阪にお住まいの落語家: カナダ出身)

「多分あの、3年間いじめられっぱなしにしないと、その……なんか味が出ない。わかんないけど、わかるの。それだけじゃないけど、でもやっぱり毎日師匠に会うと、もう……それから本当にいろいろ学ぶことができる」

弟子入りは落語家としての成長のきっかけとなる。厳しい上下関係の中に入ってこそ、落語家としての「味」を身に付けることができる。

日本文化に恋した外国人

2007年度インタビュー調査実習

伝統的日本文化と、それをプロとして背負っている外国人。日本文化の今を見つめ直してみようと、私たちゼミ生が相談して決めたインタビュー調査です。東京だけでなく京都や大阪にまで出かけて、大相撲、茶道、落語、日本画、木版画にプロとして取り組んでいる方々、計6名からお話を伺いました。それぞれのお話の中から、私たちの心に響いた声を紹介합니다。

2007年度2年ゼミ生

安達薫・石井希・稲野邊早紀・稲福秀哉・小島千明・高橋茉莉子・辻井文男・中村由衣・野沢仁美・舟橋祐子・古市裕子・星野久子・三股恭子・宮本真帆・村上智彦・室屋りえ

人びとの素顔を伝えたい

「(ブータンは)『GNH』(国民総幸福量)とか『最後の桃源郷』とか、そういう理想的なイメージでばかり語られてしまうので…そういう言葉を使わなくても十分魅力的な国なんですよっていうのを」(風の旅行社)
 「話をした相手が何を考えているのか、『こんなことがうれしいんだな』っていうような本当に生の感覚。それを感じてほしい」(道祖神)
 「インドっていうひとつのイメージじゃなくて、いろんなイメージを作り出していかなくちゃいけないんだ。それが我々の仕事」(ピーエス観光)
 「スペインは嫌がるんですよ。…『闘牛とフラメンコだけじゃ嫌だ、うちは普通の国だ』って」(太陽海外航空)



太陽海外航空 久本さん

外から一方的に抱きがちなイメージだけにとどまらない、その国で暮らす人びとの様々な日常を伝えたい。そういう真っ直ぐな想いが伝わってきた。

観光のジレンマ

「我々から見ると、ブーム的にどーんと有名になって欲しくないっていう部分もあるんですね。そうすると荒らされるだけで」(スペースワールド)

「安いだけとか、とにかく『ぼーっ』っといくツアーは作るにしても、あえて積極的には薦めない」(フィンツアー)

多くの人に共通して求められる観光商品も作りながら、効率や利益ばかりが優先されるマスツーリズムのあり方へは違和感を抱いているようだった。



道祖神 紙田さん(右)



ピーエス観光 水野さん(真ん中)

<会社紹介>

【沖縄ツアーリスト】	沖縄県内に20以上の営業所を持つ、地元密着の沖縄専門旅行会社 「サンゴ礁植え付けエコツアー 3・4日間」などを催行
【道祖神】	アフリカの旅を作り続けて30年のアフリカ専門旅行会社 「ウガンダ・ンジェニ村ホームステイ 9日間」などを催行
【スペースワールド】	モロッコを始めとして、海外へのこだわりツアーを個人旅行ベースで提供する旅行会社 「魅惑のモロッコ・マラケシュ フリー7日間」などを催行
【太陽海外航空】	スペイン・ポルトガル専門の旅行会社。旅行記のインターネット出版も行っている 「アンダルシア スケッチ旅行 15日間」などを催行
【風の旅行社】	ブータン、ネパール、ペルーなどの地域を取り扱う旅行会社 「ブータン パロホームステイと農村散策 9日間」などを催行
【フィンツアー】	フィンランドを中心に北欧地域を専門に取り扱う旅行会社 「ムーミンファンのためのムーミン物語 8日間」などを催行
【ピーエス観光】	創業50年の歴史を持ち、多彩なインドを紹介するインド専門旅行会社 「お釈迦様の8大聖地満願の旅 11日間」などを催行

2008年度2年ゼミ生

石田優子・大野真里奈・小栗亜也奈・加藤琴巳・毛塚彩子・坂本瑛理・佐藤大地・杉本陽一・鈴間公子・高木絵美・多久島萌美・谷島聡子・張千尋・中村諒子・長田晃子・長森菜美子・光悦子・布戸百合子

地域専門旅行会社で働く人びと

2008年度インタビュー調査実習

観光学部交流文化学科、それは世界の様々な文化がお互いに出会い交流する地球時代の

観光について考えるところです。文化人類学のゼミで勉強している私たちにとって、

「地域専門旅行会社で働く人びと」は、どこか文化人類学者に似ている気がします。

そのお仕事はどのような魅力を持っているのか、生き生きとした声に耳を傾けて具体的に考えてみたいと思います。

現地のことに夢中になる

「純粹に楽しいですよ、その国に関わっていただけることが」(風の旅行社)
 「一日中ずっとアフリカの事を考えていただける」(道祖神)
 「沖縄好きだったら、もう一日中沖縄のこと考えればいい。お客さんと一日中沖縄のこと話してればいい」(沖縄ツアーリスト)

大好きな国や地域に関わっていただけるからこそ、仕事が楽しくて仕方がない。そういった様子が声にあふれていた。



風の旅行社 小林さん

プロだからこそ

「専門会社としてそういう(他社では対応できないこと)受け皿に」(沖縄ツアーリスト)
 「何が何でもインドはこうだっていうのではなくて、こういう旅を求めているのであれば、こういう魅力がありますよ」(ピーエス観光)
 「これが良くてこれは悪いってのはないんじゃないかな。ただ、それがあっても引き出しをつくっておくのが大事」(フィンツアー)

参加者が年に2人でも催行されるツアーなど、お客の多様なニーズに対応できる。何でも任せろ!という自信が伝わってきた。



フィンツアー 遠藤さん(右)

地域とのつながり

「本当に向こうにいる人と一緒になって、もうそれこそ、ああでもないこうでもない言いながら」(風の旅行社)
 「現地も喜び、お客様もハッピー、我々もハッピーっていうのが一番嬉しい」(スペースワールド)
 「みんなスペインという一つの国(とのつながり)で生きているわけですよ、日本でもね」(太陽海外航空)

専門家としてお客と向き合うためには、自分がまずどのようにその国と関わるのか。単に個々の国ぐにを観光地として取り扱うのではなく、現地の人びととの付き合いを深めてゆこうとする姿勢が伝わってきた。



スペースワールドでのインタビュー調査

聞き書き 廬山温泉成立史

文・写真 稲垣勉

台湾中部の廬山温泉は、日本人にとつて忘れることの出来ない霧社事件の記憶と背中合わせの歴史を持っている。本稿では温泉の開発に深く関わった台湾原住民セデック族の有力者・洪仁徳氏と夫人の邱阿妹氏からの聞き取りをもとに、廬山温泉の成立過程を追い、台湾における温泉文化、原住民（台湾において、「原住民」という言葉は差別的な意味を含んでいない。先住民は法的に「台湾原住民族」と規定され、自稱も「原住民」であるため、本稿ではこの語を用いる）と観光開発の関係を考えてみることにしよう。



廬山温泉における聞き取り調査（中央 洪仁徳氏）

査期間を短縮して山を下った。その夕刻から廬山温泉は記録的な豪雨に見舞われ、渓谷の増水で壊滅的な被害を被った。死者こそ一名にとどまったものの、旅館の倒壊一軒、流失、全壊各一軒という状況で、ほとんど全ての営業施設が何らかの被害を受けた。本稿で掲載する写真は、被災前の廬山温泉、最後の姿である。

懐しさと異質性を持つ台湾温泉

廬山温泉は台湾の中央部・南投縣仁愛郷に立地している。中部の中心都市・台中市から東南東に六〇kmあまり、霧社事件の舞台となった霧社からさらに一〇kmほど山中に分け入る。地理的な位置はむしろ西側の太平洋岸に近いものの、花蓮からの道路事情が悪く公共交通を含めアクセスは東側の台中からが中心である。台湾を南北に貫く中央山脈の西麓に位置し、周囲には三、〇〇〇m級の山々が連なっている。

本稿でとりまとめた聞き取りは、二〇〇八年九月に行われた。折しも辛癸克颱風（台風二三号）が接近していたものの、九月二二日、廬山温泉は薄曇りののんびりした朝を迎えていた。しかし洪氏は台中に避難することを薦め、筆者は多少いぶかりながら、調

わば台湾の温泉は現地文化に接ぎ木された日本であり、その後国民党政権下で変容しながら、最近ふたたび大風呂、檜風呂など「温泉先進国」日本のポキヤブラリを取り入れることで変身しつつある。台湾の温泉は複雑な文化混淆のプロセスの中に置かれており、われわれにとって懐かしさと異質性を併せ持った独特の空間を形成している。

昭和五年生まれ

日本と同じく環太平洋火山帯に属する台湾は、数多くの温泉に恵まれている。台湾の温泉が現在に続く形態を整えたのは、一八八五年から一九四五年に至る日本による植民地統治期いわゆる日治時代である。それまでの原住民による原初的な温泉利用に、宿泊施設、入浴施設などを備えた日本型温泉浴が導入され、旅館が建ち並ぶ温泉街が形成された例も見られる。かつて台湾四大温泉と言われた北投（台北北郊）、陽明山（台北北郊）、關子嶺（嘉義近郊）、四重溪（台湾南部）は多少の異同はあるものの、多くはこの経緯で「発見」され日本人植民者によって温泉地としての体裁を整えていった。現在大規模な温泉地に成長している烏來や知本も同様である。い

洪「私は昭和五年に霧社で生まれました。霧社事件の一日前のことです。育ったのは埔里北方の中原です。高山の人（山岳原住民）はオランダ時代、鄭成功時代から平地民の進出に迫られて平地の土地を失っていきました。私の家系も台中、草屯（台中郊外）と移動し、曾祖父の代は埔里、祖父、父の代に眉溪（霧社より多少下手の集落、霧社に移りました。さらに萬大水庫（碧湖、二九三九年完成）のダム建設でまた移住せざるを得ませんでした。私の育った中原は、

霧社事件

1930年、現在の南投縣仁愛郷霧社で起こった原住民セデック族による反乱。マヘボ（廬山温泉）の首長モーナ・ルダオに率いられた原住民が、霧社公学校で行われていた運動会を襲撃し、140名近い日本人が殺害された。これに対し台湾総督府は軍、警察に加え親日本派の原住民を用いた鎮圧を行い、結果として1000名あまりの反乱原住民が殺害、自殺もしくは行方不明になったといわれる。

直接の原因は、原住民統治の末端にあった日本人警察官の質の低さ、労役の強制、労賃の搾取などへの反発といわれているが、理蕃政策と言われる原住民を対象とした「文明化」政策が破綻していたことは否定できない。霧社事件後、対原住民政策はいわゆる皇民化政策へと大きく転換することになる。



霧社事件の記念像
霧社事件は戦後、国民党政権下で山地同胞（原住民）による抗日運動として、別の政治的な意味を与えられるようになる。

家内が生まれ育った川中島³⁾(現在の清流の隣の集落です。)

洪「霧社事件後のマヘボ(廬山温泉)ですが、それまで三つの姓に分かれて住んでいた住民が、一カ所にまとめられました。姓ごとに列を作り、三列の家が並ぶかたちです。場所は現在の吊り橋より、少し下流に下った塔羅灣溪南岸の台地の上です。」

邱「霧社事件以前、私の母の時代には、河原のあちこちから温泉が湧いており、マヘボの原住民は一日の山仕事が終わったあと、そこで疲れを癒していました。4)

洪「昭和十八年に温泉を利用した警察の招待所が作られ、富士招待所と名付けられます。マヘボ一帯も富士温泉と言われるようになりました。ただ、こう呼んでいたのは日本人だけで、原住民は従来通りマヘボという地名を使っていました。これは日本人が去り、国民政府が来ても変わりませんでした。」

洪「日本敗戦後、富士招待所はすぐに接收され、国民政府が管理人を置いて管理していました。」

洪「蒋介石が台湾に移るのは民国三八(一九四九)年ですが、比較的すぐにマヘボにやって来たと思います。そのうち招待所は蒋介石自身によって廬山招待所と書き換えられ、マヘボも廬山温泉という名前に変わります。蒋介石の晩年は胃を病んでいましたので、二カ月ほどの長期で滞在し飲泉していました。蒋介石の滞在時は警備が大変でした。」

多くの植民地と同様に、ここでも他者による「風景の発見」が行われている。日本人入植者は中央山脈の山容に富士山の姿を認め、蒋介石は南京政府の夏の行政中心であり、自らも別荘を営んだ江西省廬山を見いだした。元々その土地に土着的権利を持つ者

の立場からすれば、きわめて身勝手な論理に過ぎないものの、故郷喪失者の心情と行動という視点から見ると興味深い事例を提供している。

原住民と平地民

洪「私が旅館(清溪温泉会館)を開業したときには、すでに二つの旅館がありました。ひとつは廬山招待所を管理していた楊という平地民が廬山招待所前の土地を登記して作ったところですが、この人は警察の給仕をしていたのですが、招待所の管理人になり、妻妾二人に旅館を引き継ぎました。代は変わりましたが、蜜月館と廬山園という名前の大型旅館として、現在でも一族が経営しています。もう一つは仁愛郷長をしていた高永清⁵⁾という人が土地を登記して始めたところです。」

邱「高さんのところ(碧輝温泉会館・旧名碧華山荘)はまだ所有していますが、今では経営はしていません。旅館を貸して平地民が経営しています。」

洪「私が旅館を始めたのは三〇年ほど前(一九八一年)のことですが、当時の廬山温泉は、わずかに旅館はあるものの、あまりうまくいっていませんでした。なぜなら道路状況が非常に悪く、温泉客がなかなか来てくれなかったからです。自動車が入れるのは霧社まで、そこから先はオートバイがせいぜいでした。私はまず初めに、トラクターを使って自分で道の拡幅と整備を行いました。道が整備されると、次々と平地民が旅館を始めようになりました。」

洪「開業した当初は二階建てで、規模は二〇室をちょっと上回

る程度でした。各部屋に温泉を引いた浴室を設けましたが、最初は臨時の食堂しかなく大変な苦勞をしました。」

邱「外で食事してもらおうというようなこともありませんでした。」

洪「建設資金は教員をしていましたので、その退職金でまかないました。」

邱「退職金は一時金でもらうか、年金でもらうか選ぶことが出来ます。主人は何の相談も無しに一時金でもらい、さらにそれでは足りず借り入れしたので大変でした。私も教員をしていたのですが、辞められなくなっていました。」

洪「結局、原住民が所有する旅館は八軒ありました。今残っているのは私のところと、先ほどお話しした一軒のみです。六軒は廃業し平地民に売却されました。原住民の事業は平地民に比べ資

金不足であることが原因です。」

邱「それから差別もあります。原住民が経営している旅館にはお客がなかなか来てくれないということがありました。」

洪「私のところは何とか経営を続け、再投資し規模を拡大してきました。」

洪「ここで土地を登記できるのは原住民だけです。廬山温泉一帯は原住民の権利が守られる一種の自治区になっています。でも現在廬山温泉で事業を行っている人のほとんどは平地民です。平地民は原住民との間で土地の賃貸契約を結んで事業を立ち上げます。しかし賃貸契約は表面だけで、事実上の所有権です。また建築上も多くは違法です。一定以上の斜面には建物は建てることが出来ません。しかしそうしたところにも旅館は建設され、増築さ



上 洪氏が所有する清溪温泉会館 中 溪谷兩岸の温泉街を結ぶ吊り橋 下 塔羅灣溪に沿った廬山温泉の旅館群

れていきます。高山の人は急斜面や地盤の悪いところには家を建てません。かなりの旅館は違法建築であるが故に登録できません。不動産関係、営業関係の税金を納める代わりに違法建物が黙認され営業しているというのが現状でしょう。最近では埔里の大規模な企業が参入してくるようになりました。」

洪氏は師範学校時代に原住民と平地民との経済力の差を痛感したという。また教員として勤務した廬山温泉で温泉に親しみ、郷長時代から地域開発における温泉の可能性を考えていた。その後貧しさを克服し経済力をつけるための自活事業として、自ら旅館経営に乗り出すこととなった。しかし皮肉なことに、温泉旅館のようない装置産業では、初期投資と拡大のための追加投資が不可欠であり、元々資金力の乏しい原住民は不利な立場にある。廬山温泉の開発が急展開した時期は、台湾における大衆観光の勃興期にあたる。遊覧バスでやってくる大量の観光客を収容するには、それなりの施設規模が必要である。早期に参入し拡大サイクルに乗ることが出来た一部を除き、拡大のための追加投資にようする資金力に欠ける原住民の旅館進出は淘汰されていかざるを得なかった。

現在の廬山温泉

洪「マホには二〇〇カ所程度の温泉の湧出があると思います。ただそのうち半分ほどは、河原などに湧いているという理由で使うことが出来ません。残りは各旅館で使用されていますが、各々が複数の温泉頭（源泉）を持つことが一般的です。私のところは敷地内の高台に三カ所の温泉頭を持っており、ポンプで汲み出しています。それを一旦タンクに貯め、各客室に給湯します。廬山温

泉には統一的に温泉を管理する組織はありません。各旅館は自己責任で温泉を管理し、自分の温泉頭からの温泉を利用しています。」
邱「行政は温泉を一カ所に集め、集中的に管理したいと考えているかも知れませんが、各旅館はこうした集中管理で十分な量の温泉を確保できるか、むしろ心配しています。」

洪「温泉の湧出量は季節によって異なります。雨の多い夏は湧出量が多く、少ない冬は減少します。夏と冬で水温は変化しません。旅館は増加しましたが、温泉に関しての問題はこれまで生じてきませんでした。」

洪「台湾では客室に付設された浴室の浴槽での、温泉利用が一般的です。浴槽に温泉を貯め、入浴後は流すという使い方は。」

邱「北投あたりでは男女別浴で裸になって入浴する日式（日本風）の大風呂があるようですが、廬山温泉ではまだほとんどありません。大きなお風呂は、温泉プール形式のもので男女混浴、水着と水泳帽を着用して入浴します。温泉プール形式の場合は、水を加えて湯温を下げるのが一般的です。」

洪「温泉プールを設置できるかどうかは、敷地条件や経営規模で決まってきます。私のところにも温泉プールがあったのですが、台風による洪水で流されてしまいました。現在のものは岩などを使った自然な造りの露天風呂形式ですが、水着を着て入浴する裸で利用します。」

邱「今人気があるのは家族風呂です。家族全員が入ることのできる大きな浴室と浴槽です。客室に付設されている場合もありますが、別に設置して共同利用する場合もあります。専用ですの裸で利用します。」

邱「日帰りの温泉浴もあります。客室と温泉だけを時間利用し、宿泊はしないというお客様です。彰化（西海岸の都市、台中の南西二〇㎞ほど）あたりまでの比較的近いところから来られます。ただ

私たちの旅館ではほとんどの方が宿泊されます。宿泊されるお客様は温泉に入浴され、夜は温泉街をそぞろ歩きという楽しみ方です。吊り橋のところから温泉街が川に沿って続いています。お土産を見て回り、多少お腹がすけば屋台で軽い食事も出来ます。セブン・イレブンなどのコンビニもありますよ。お酒を飲むところはありません。カラオケはありますが、以前ほど盛んではなくなっています。カラオケの設備に対する税金が高く、あまりうまいのある商売ではないからです。私たちのところでも以前はカラオケがありました。今はやめてしまいました。」

土地の権利と資本の論理

歴史的に廬山温泉（マホ）は原住民セテック族に属する土地であった。開発前史は植民化、強制的な国民化の中で、他者によって風景が発見されていく過程そのものと言えよう。一方近代温泉地としての廬山温泉の歴史は、経済的に急成長する台湾における土着の権利と資本の論理のせめぎ合いであった。

もともと山間部の土地は生産性が低く、平地民からは等閑視されてきた。しかし一旦温泉地として観光の枠組みに取り込まれると、山間部の土地は商品価値を持ち始め、原住民にとっての土着的な生活空間、生産の場が資本主義経済に組み込まれていく。しかし山間部が商品価値を持つのは、開発の為に資本投下が前提であり、



上 土地販売の看板 中 廬山温泉案内図 下 蔣介石が滞在した廬山招待所（現・蔣公行館）

觀光化は資金力のある平地民の流入を招き、平地民の経済的支配が山間地で確立する過程でもある。これにもなって原住民の経済的権益は事実上大きく制約されることとなった。

一方原住民自体の政治的位置づけはさらに複雑で、大きな変化にさらされてきた。国民党政権下では「内なる他者」として、日治時代の皇民化政策同様、「文明化」政策の対象となり国民化が推し進められる。しかし国際情勢こと

に台中関係の変化にともない、李登輝政権・民進黨政権下で「二つの中国」「ひとつの台湾、ひとつの中国」あるいは「新台湾人」などの主張が表面化すると、台湾アイデンティティの高まりを背景に、原住民は台湾の固有性、独自性を保証する存在へと転化していく。九〇年代の民主化にもなって原住民自身による権利回復運動が生じたことも事実である。しかし原住民自身による運動以上に、原住民が直面する経済的、



霧社事件で反乱原住民を指揮したモーナ・ルダオ

社会的問題が解決されないまま、台湾原住民の存在あるいは表象は台湾における内なる他者として、大陸に対して台湾の固有性を主張する記号として芸能界、観光などの場面で一人歩きし始める。

廬山温泉でも山岳原住民の意匠や表象が様々なところで用いられている。経済的には平地民の圧倒的な影響下にありながら、観光上のアイデンティティを確立するためには山岳原住民の存在が

不可欠であるという状況は、現在「台湾」が置かれている状況の縮図と言えよう。

土着の知恵

廬山温泉は台湾の有名温泉地の中でも、先進的な場所とはいえない。現在台湾の温泉は、世界的な傾向となったスパ型のトリートメント導入し、日本の高級旅館を模した和室や野天風呂を取り入れて急速なグローバル化の過程にある。廬山温泉ではこうした傾向が多少は見られるものの、まだ一般化するには至っていない。また大規模ホテル企業も未進出である。反面、この状況がレトロな温泉地の風情を残し、われわれにとって懐かしい雰囲気を感じさせる原因になっている。

とはいえ廬山温泉がグローバル化と無縁なわけではない。洪氏が所有する清溪温泉会館は現在インドネシア人の

従業員を雇用している。山間部における労働人口の減少、賃金の上昇への対策である。朝食に出す日本風の卵焼きを器用に作るインドネシア人の存在は、そのままポストコロナリアルな状況とグローバル化が複雑に結合した現在の廬山温泉を象徴している。

冒頭で述べた台風による被災後の調査によると、建築上適法であった施設は1割にも満たなかったという。洪氏が指摘した通

り、急斜面、軟弱な地盤、渓谷の流れを無視して建設された施設は甚大な被害を被った。いわば廬山温泉は土着の知恵を軽んじたツケを払ったということが出来よう。被害はきわめて広範囲であり、今後廬山温泉は復興の過程で大きく変貌していくことになる。今後ともポストコロナリティ、グローバル化、原住民文化が複雑に絡み合う変貌の過程を、注意深く観察していくことになりたい。

謝辞：本稿は文部科学省私立大学経営費補助金「地域共同研究からの一部援助で実施した調査をもとにしている。付記して感謝にかえたい。

注

- 1) 台湾の先住民は自らの総称としてこの用語を用いている。区分は時代に連れて増加しており、現在は二〇〇八年に「タイアル族から分離独立したセテック族を含め」四の種族が公認されている。
- 2) 洪氏が意識する民族境界は学問的、行政的な区分とは多少異なる。明確な境界は高山族（山岳原住民）とそれ以外の間に引かれ、このインタビュウでは漢化した原住民である平埔を含む高山族以外の人々全体を平地民という名称で呼んでいる。
- 3) 霧社事件に続き、反乱原住民の掃討で日本に協力した原住民、いわゆる味方番を日本側が教唆したとされる、投降反乱原住民の虐殺事件、第二霧社事件が発生したこの生き残りを移住させ

参考文献

- 1) 曾山 毅 『植民地台湾と近代ツーリズム』、青弓社 二〇〇三年
- 2) 高田京子 『台湾温泉天国』新潮社、二〇〇二年
- 3) 日本順益台湾原住民研究会編『台湾原住民研究への招待』風響社、一九九八年
- 4) 林えいだい 『霧社の反乱・民衆側の証言』新評論 二〇〇二年
- 5) 春山明哲 『近代日本と台湾』霧社事件・植民地統治政策の研究』藤原書店 二〇〇八年
- 6) 黄淑娥、丁郁菁、劉曜華 『觀光旅遊地環境意識興發行為之研究』以廬山温泉地區為例。台灣觀光再出發學術研討會、二〇〇九年

7) 台湾の温泉において裸で入浴する大風呂は、それほど珍しいものではない。ことに最近日本における温泉ブームを受けて増加傾向にある。しかし従来からの日本式大風呂は、日治期に成立した温泉地に残った日本の伝統であり、廬山温泉のように国民政府下で本格的に温泉地としての開発が始まった地域ではかならずしも伝承されていない。

洪 仁徳

サップ・ピフ
(日本名 野上行義)
セテック族。1930年、霧社で生まれる。萬大水庫(ダム湖)の建設にともなって、埔里の北にある中原に移住する。教員となり春陽(霧社と廬山温泉の間にある集落・旧名は櫻)の小学校に勤務。その後1968年から仁愛郷の郷長を務め、再度教員となり退職。1981年、廬山温泉に旅館を開業する。現在は埔里に在住。

邱 阿妹

イワン・ダクン
(日本名 安田道子)
セテック族。1937年、川中島生まれ。洪仁徳氏の夫人。元教員。現在は埔里に在住。妹はモーナ・ルダオの娘の養女となる。



読書案内

日本の温泉の歴史をひもとく

本号の特集テーマに関連する書籍の中から選んだのは、日本の近現代の温泉の歴史をひもとく2冊。

『近代ツーリズムと温泉』

関戸明子 著

ナカニシヤ出版(2007)1995円

温

泉好きで知られる日本人だが、はたしてあなたはいくつ温泉を知っているだろうか。たとえ数多くの温泉を知っていたとしても、行ったことのない所ばかりという人がほとんどだろう。本書の優れた点は、今日あまたある日本全国の温泉地を取り上げて、明治以降約70年にわたる近代化の流れの中に位置づけた点にある。

本書によれば、温泉地に関

アによる温泉地情報の大衆への伝達にある。本書はこれらの諸点を次のような史料を読み解くことで明らかにしていく。

①については、内務省衛生局発行の『日本鉱泉誌』などをもち、温泉地への入込客数の推移を示している。②と③については、鉄道省と日本旅行協会が編集・出版してきた『温泉案内』などをもち、主要都市からの交通手段の発達と時間距離の短縮をもとめたり、療養や行楽、慰安といったサービスの質的变化に分析を加えたりしている。中でも特筆すべきは④についてであり、昭和初期に盛んに行われた新聞社主催の人気投票を通して、温泉人気の加熱ぶりを描き出す。そして、鉄道やトンネル開通を契機に発行された広域の鳥瞰図を分析することで、いくつかの温泉地が郡単位で結束して入湯客を誘致するようになったプロセスを明らかにしている。

このように、近代においていく

わる近代化の中身とは、①個人の経済力向上と休暇制度の整備による需要の増大、②安全で速い交通機関の整備、③温泉地における様々なサービスの充実、④メデイ



『黒川温泉のドン』

— 後藤哲也の「再生」の法則

後藤哲也 著

朝日新聞社(2005)1260円

黒

「川温泉のドン」というタイトルにまず圧倒されるが、本書はアウトロー小説ではない。またタイトルには「再生の法則」ともあるが、本

書は単なるhow to本でもない。黒川温泉のドンとされる著者は、参与観察や定点観測とも言えるようなことを実に丹念におこない、観察した事象にパターンや規則性を見出していく。そのような姿勢はまさに研究者そのものなのである。

著者は黒川温泉(熊本県)の新明館という旅館の経営者であり、自らの手で洞窟風呂を掘るなどして、

で削った板は規格品と異なり寸法がばらばらだが、そのような板で構成された建物の中に、自然との調和や心を落ち着かせる何物かがあるのを見出したという。このようにして、人の行動や人を惹き付けるものの中に、パターンや規則性を見出したのである。

没個性的だった黒川温泉を、一躍女性客を中心に高い人気を誇る温泉地に育て上げた人物として知られる。具体的に著者がおこなったことは、京都や軽井沢などに足繁く通い、行き交う観光客の会話を立ち聞きしたり、人を惹きつける店の間口や板の寸法を測ったりした。このような観光地の観察を通して、1980年前後の京都で、剪定された松や池、茶室などが整然と配置された寺院から、コケ庭などの自然を再現した寺院に、客足が移っていったことを見出した。また、手に

つかの地域が商品改良と販売促進のために統合し、他地域との競争を繰り広げながら地域色を強めて分化していくという現象は、酒造業や農業の産地形成でも確認されている。このことから、本書は近代の地域研究としても良書の一つだと言える。また、本書は高い視点から温泉地を俯瞰したものであり、重箱の隅をつつくような分析がない分、容易に通読できる。さらに、分析に用いた書籍を詳細に解説しており、近代温泉研究の書誌情報としても大いに役立つ。

このコーナーでは観光学部が行う国際交流の現場を随時報告していきます。

最近の観光学部講演会

開催日	講演者	演題
2008 12/18	サミラ・ムーサ スルタン・カブース大学准教授、国家評議会議員	オマーンの観光について
2009 4/3	長田明 シエラトン・グランデ・トーキョーベイ・ホテル 総支配人	観光・ホスピタリティ産業の魅力および現代的課題
6/15	張世満 中国・山西大学歴史文化旅遊学院副院長、副教授	観光産業の位置付けを考えよう
7/8	グエン・ティエン・ナム ベトナム国家大学ハノイ社会人文学大学 国際文化研究センター 副所長	ベトナム文化、そして日本文化との比較

進む海外との学部間交流

マカオ代表団来訪 2009.4.6



上 代表団に観光学部の教育を説明する豊田学部長 下 社会文化長官譚俊榮氏と記念品を交換する豊田学部長

四 月六日、マカオ（澳門）から、社会文化長官・譚俊榮氏を団長とする代表団が観光学部を訪問した。代表団は政府、大学、実業界から構成され、教育上の協力関係を模索することが目的であった。

周知のようにマカオは、ポルトガルの統治下から、一九九九年に中国の特別行政区となった。珠江河口に位置するマカオは、多面的な顔を持った観光都市である。香港や広州にも近く、ポルトガルの

文化史跡は世界遺産に指定され、一方で従来からマカオ経済を支えてきたカジノは、中国の経済発展にともないラスベガスをしのぐ、世界最大のカジノ地域に成長している。

中国とポルトガルの文化が融合した観光都市マカオは、観光学部にとっても可能性あるパートナーであり、大学間協定を含め今後の協力関係を鋭意検討していくことで合意がなされた。

タマサート大学と学部間提携 2009.1.15



上 木立に囲まれた教養学部の中庭 中 本母校地タープラチャンキャンパスの校舎群 下 創立者ブリーディー・パノムヨンの銅像と、民主化の象徴となっている三角屋根。

さ 一月十五日、立教大学観光学部は、タイのタマサート大学教養学部との間で学部間協定を締結した。すでに立教大学はチュラロンコン大学と大学間提携しており、今回の提携でタイを代表する二大学双方との協力関係が樹立されたことになる。

タマサート大学は一九三四年に設立された、タイで二番目に長い歴史を持つ国立大学である。創立者ブリーディー・パノムヨンはタイの王政から立憲君主制への移行に大きな役割を果たした政治家で、後に首相に就任する。この伝統を受けて、

同大学はタイの民主化に大きな役割を果たし、タマサートの歴史はタイ民主化の歴史といわれている。

現在は理工系を含む総合大学に成長し、最高学府としてタイ社会に重きをなしている。教養学部は大学院が王宮に隣接したチャオプラヤ川沿いのタープラチャンキャンパス、学部教育が郊外の広大なランシットキャンパスで実施されている。今後両学部間で教員や学生の相互交流、教育・研究プロジェクトを促進が計画されており、すでに学生の受け入れが始まっている。

中山大学（中国・広州市）キャンパス



中山大学での講義は、筆者にとって驚きの連続であったが、受講生の学ぶということに対する真剣さに感動を受けた一週間であった。

は中国語で書かれているのではないかと思ったが、その書物を手に取りページをめくると、英語で書かれているではないか。しかも著者は米国の著名な経済学者で、日本語訳も出版されている書物であった。私は学生に「この本は他の講義で今利用しているテキストですか」と尋ねたところ、

「二年生のときに経済学の授業で使った本です」との答えが返ってきた。受講生からは、「観光経済学の講義を聴講するに当たって役に立つかも知れないので持ってきた」との返事が返ってきた。それを聞いて、私は宿舍へ戻るやいなや、用意していたいった日本語のパワーポイントを英

文へ書きかえる作業をほぼ毎日のように行なった（受講生には私が日本からメール添付で送った日本語の参考資料・教材が中国語に翻訳され、それが配布されていた）。

「価格の差別化」の説明が終了した直後の休み時間であった。筆者は、経済

学部で学生ではない受講生には内容が少々難しかったかも知れないと思い、早速、数人の受講生に尋ねてみた。しかし、ここでも返ってきた答えに驚かされた。受講生からは、「すでに経済学の授業を取っているのだから、それほど難しいとは思わなかった。むしろ既に学んだ理論が観光の領域で応用できるということを知ることができた」との返事であった。



中山大学での講義風景

中山大学における「観光経済学」講義

小沢健市
2009.3

中

山大学の「中山」は、日本人もよく知っている孫文からとったものである。中山大学の名門大学の一つである。本校では主として大学院生の教育が行なわれており、学部教育は、広州市から南西へバスで一時間半ほどの珠海にある校舎（珠海キャンパス）で行なわれている。珠海キャンパスから一時間ほどさらに下ると、マカオにある有名なマカオタワーが目の前に見え、まるで地続きになっているかのような錯覚さえ覚えさせる。

緊張感溢れる教室

筆者は、今回、珠海キャンパスで「観光経済学」の主として二年生を対象に「観光経済学」の講義を行なう機会を持った。受講生はおおよそ一七〇名ほどであった。講義開始前は、日本の多くの大学で見られるように、教室内は友人同士の談笑に覆われ、正に騒々しいといった状態であった。最初、「中山大学も日本の大学のように授業中も私語が多いのかもしれない」と少々憂鬱になったが、筆者の危惧は見

事にはずれ、講義が始まると、教室内は打って変わって静寂に包まれ、学生諸君は私の話とパワーポイントの画面に全神経を集中させる。静寂な中にも受講生の真剣なまなざしがひしひしと感じられる。緊張感溢れる時間であった。一七〇名の受講生全員が目が私とパワーポイントの画面に注がれ、他方では、真剣にノートをとるといった光景を目の当たりにし、筆者自身もついつい講義時間を超過し、本来は一回の講義時間が四〇分であったものが二倍の八〇分ほどになることもしばしばであった。それにも関わらず、彼らとその間緊張感を持続し続けたことは、筆者には正に驚きであった。受講生諸君には、遠く離れた地からではあるが、改めて感謝の意を表したいと思う。

英文原書で学ぶ

もうひとつ驚くことがあった。それは、講義開始から二日間ほど過ぎたある休み時間中のことであった。筆者が教室内を回りながら受講生と話を交わしているとき、数人の学生が分厚い経済学の書物を机上においているのが目に止まり、私

2009年度 立教大学観光研究所 公開講座

立教大学観光研究所では、以下の2つの

観光産業の入門的公開講座を実施しています。

学生はもちろん、社会人など広く受講者を受け入れています。

旅行業講座

「国内旅行業務取扱管理者試験」

「総合旅行業務取扱管理者試験」

のための準備講座

(2009年4月開講7月修了)

「旅行業講座」は、毎年10月に全国で行われる国家試験「総合旅行業務取扱管理者試験」とそれに先立ち9月に行われる「国内旅行業務取扱管理者試験」のための準備講座です。旅行業界とその業務に関心を持つ人たちが受講しています。旅行業に必要な専門的、かつ実地的な知識を一流の講師陣が、実務経験のない人にもわかりやすく講義します。講義内容では、旅行業法から海外・国内観光資源、旅行実務などの幅広い内容を扱います。

ホスピタリティ・マネジメント講座

宿泊・外食産業の理論と経営、最新動向を学ぶ

(2009年9月末開講12月修了)

ホテル・旅館業・外食産業を中心とするサービス産業は、今日「ホスピタリティ産業」と呼ばれています。「ホスピタリティ・マネジメント講座」では、ホスピタリティ産業の基本理念から、マネジメントの基礎理論、マーケティング、人事、営業企画、法律、最新の業界動向といった幅広い内容まで、業界の第一線の実務家を講師に招いて講義を行います。

講座に関する問い合わせは

立教大学観光研究所事務局

(池袋キャンパスミツチエル館)

〒171-8501

東京都豊島区西池袋3-34-1

TEL 03-3985-2577 FAX 03-3985-0279

Email: kanken@grp.rikkyo.ne.jp

http://www.rikkyo.ac.jp/research/laboratory/IT/



次号予告

2009年12月刊行予定

特集

乗り物とその世界

筆者紹介 (50音順)

稲垣勉 (いながき・つとむ)

観光学部教授

観光消費論、文化研究専攻。1973年立教大学社会学部観光学専攻卒業、同大学院社会学研究科修士課程修了。1987年より本学勤務。1994～95年ヴァージニア工科大学客員教授、2000～01年ハワイ大学客員教授。主著に『観光産業の知識』、『ホテル産業のリエンジニアリング戦略-環境・コミュニティ・表現・スタイル・場所性-』(以上単著)、Japanese Tourists (共編) など。

岩田晋典 (いわた・しんすけ)

観光学部助教

1999年立教大学大学院文学研究科博士前期課程修了、2004年同研究科博士後期課程修了。明海大学・大妻女子大学非常勤講師などを経て2008年より本学勤務。主な論文に「スリナム共和国における国際観光：『子どもの靴』を脱ぐとき?」、「ダビング観光における環境保全活動—沖縄県島尻郡座間味村の事例—」など。

内田彩 (うちだ・あや)

立教大学大学院観光学研究科 博士課程後期課程2年次在籍
明治大学大学院文学研究科史学専攻博士前期課程で古代における温泉を研究。観光学の視点から温泉の歴史・文化の研究を志し、2006年に立教大学大学院観光学研究科博士課程前期課程に転学。2008年より同後期課程に在籍。近世から近代の温泉地を対象に長期滞在生活の構造、観光行動を研究。

大橋健一 (おおはし・けんいち)

観光学部教授

都市人類学・都市社会学及び観光文化論専攻。1984年立教大学社会学部社会学卒業。同大学院社会学研究科博士課程前期課程修了。主要著作に『都市エスニシティの社会学』、『香港社会の人類学』、『アジア都市文化の可能性』、『観光のまなざし』の転回『観光文化学』(以上共著) など。

小沢健市 (おざわ・けんいち)

観光学部教授

1972年東洋大学経済学部卒業。成城大学大学院経済学研究科修士課程、同博士課程・東洋大学大学院博士後期課程修了。東洋大学短期大学教授をへて1998年より本学勤務。経済学博士。主な著作に『観光の経済分析』『観光を経済学する』(以上単著)、『観光学』『観光の新たな潮流』(以上共著)、『観光の経済学』(訳書) など。

交流文化

09

2009年7月25日発行

発行人 豊田由貴夫

編集人 大橋健一

デザイン 望月昭秀、戸田寛

印刷 こだま印刷株式会社

問い合わせ先

立教大学観光学部

〒352-8558 埼玉県新座市北野 1-2-26

TEL 048-471-7375

<http://www.rikkyo.ac.jp/tourism>

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

©2009 Rikkyo University, College of Tourism. Printed in Japan.

ISBN 4-9902598-6-6